『比較民俗研究』7．1993／3

巫俗語彙の語源探索

朴　相圭※

1　はじめに

身体語・天体語・地名語・巫俗系語などは，一般に多くの時間が経過しても大きな変化の見られない語彙であるとされている。したがって，これらの語に関して調査研究が進められれば，言語の発達史研究とりわけ原初的な先代語研究にとって大きな貢献となるものであろう。本稿では，こうした問題意識をもって，巫俗語系のみを対象に，これを考察し語源の探求を行なってみたい。なお，その際のアプローチは，Altai 諸語研究の立場からのものとなることを断っておきたい。

2　語彙の意味と部分的語源探索

(1)　白主（ペクチュ）[1]

済州道では上古，‘ソンダン’に‘ペクチュ’と‘ソチョンクック’という夫婦神がいたとされ，この夫婦神の間から生まれた神々が済州道全域を守護したといわれている。そして，白主の子孫達は天を神の世界と信じていた。また，大昔，済州道の現住民達は白主を tanguəl とも言ったそうである。ここで白主（‘tanguəl’）の意味を分析してみると次のようになる。

①‘Pekchu’→‘tanguəl’．‘tangol’．‘taŋgol’

と言われており，‘tanguəl’は天を示すと同時に天の指示にしたがって行動する‘Simbaŋ’〈巫覡〉を表すともいい[2]，梁柱東は[3]，「檀君王儉」は「檀」（訓は‘박달’）によってそのまま‘paktal-nimkum’と読むのが元享利貞である。‘paktalnimkum’は字のとおり「paktal の木（カバノキ科の落葉高木）から生まれた王様」の意味で‘박달’の原義が‘붉달’＝「白山」であるから‘붉달님금’すなわち「붉달（白山）の神君」と見るのが正しいようである。‘달’は句麗語「山」の意味と説明しながら太白（伯）山を 한붉뫼 ―天山といった。崔南善は「不咸文化論」において，古朝鮮「檀君」の原語について，遺事の「檀君」に着目して「壇君・檀君」および濊の「天君」「魏志東夷伝」が全部，蒙古語‘tuŋgəri［天・祭天者］’と共通する‘dangul’であることを明らかにしている。

さて，ここで叙上の研究成果を要約すれば，秦聖麒は「白主」は‘단궐’であり，意味は「神人」「巫覡」（싱방）といったのであり，梁柱東は「白山」を‘붉달’といい，そのためこの考え方

※韓国・暻園大学副教授

によれば,「白山」を‘붉님’といえるということになる。崔南善は「檀君」を‘당굴’の「祭天者」とし，また安自山は[4]，象徴語は無声の事物はその形態を詳しく象徴して人声をつくったものであるという立場をとるため（해[hæ]（太陽）－ 히다[hita]（白）／번적번적[bənzək bənzək] － 번개[bənkæ]（雷）／ 감는다[kamnunta]（閉目）－ 감앗타[kamatta]（黒）／둥글다[duŋkulta]（円）－ 돈다[donda]（週）／ 밟다[balpta]（踏）－ 발[bal]（足）のような例を参照されたい),「太陽」と「白」とは同類であるということになり，これにしたがうと「白」は「天」とも関係を持つ語であるということになろう。したがって,「白主」の「白」は「太陽」「天」「祭天者」「붉」「檀」と同一した次元の語であると考えうるし,「主」は‘님금’[nimkum]‘님’[nim]‘사람’[saram]「神霊な人」「神的人」などのように考えることができるのである。それゆえ，結局「白主」は「檀君」と同一の存在と言いうるし，古代社会においても最も重要な仕事を担当した「祭長」の意味とも考えることができるのである。

ところで,「白主」を比較言語学的に見たときにはどのようなことがいえるのであろうか。崔南善が,「白主」について「三国遺事」の「檀君」，濊の「天君」と通じる蒙古語の‘텅거리’[təngəri] との関連を指摘したのは卓見であったが，比較言語学的側面からも「白主」を蒙古語の‘tenggeri’と同様に見ることができるのであり，この‘tenggeri’は現代口語の‘tegri’にも通じるものであるところから考えると，‘tenggri’＞‘tengri’＞‘tegri’のような変化を示していることから，‘텅거리’が‘텅굴이’‘텅굴’となったものがさらに漢字化したのが「檀君」であり，この場合は音借したもので,「白主」の場合は音借の意味化というべきものである。

(2) Ulahan-Oîun（ウラハン，オイウン）

Sieroszewski（シエロスゼフスキ）はYakutのShamanを区別したが，その中でUlahan-Oîunを大Shamanと呼称した。ここで‘Ulahan’が「大」になった経緯について語源的に探索してみると，‘Ulahan’は‘Ula’＋‘han’の合成語と見られるし，‘Ul’＋‘a’で‘a’が‘Ul’に付け加えられた接尾語の役割をしており，この‘Ul’は‘Ut’から変化したものといえる[5]。そして‘han’は,「王」「大」の意味を考えると，‘Ut’＋‘han’は「高くて大きい」そして「上位者」「偉大な人」などのような意味となるのだということができるのである。

このことは次のように要約できよう。

① 語学的見解から。

イ．‘Ul’＋‘a’＋‘han’と分析可能

ロ．‘Ul’はstemとして‘ut’＞‘Ul’～‘Ur’に変化したものと見做されるのであり，

ハ．‘-a’は添加された語尾として接尾語的機能を果たし，また‘Ul’と‘han’の間で媒介母音の役割も果たしながら両語彙は合成語になったものと考えられよう。

ニ．‘Ul’は‘Ut’の変化形であるため，語源的に見るときは‘Ut’が「上位」の意味となり，したがって‘Ul’もやはり「上位」の意味になるものと考えられる。

ホ．この‘Ul’は高句麗系語を含めたアルタイ諸語から現われるものであることを考慮する

と，北方語として古代社会から今日の 웃［Ut］に至るまで長い間に変化を経て来ながら語末で '-t' ＞ '-r' ～ '-l' となったものであるといえよう。

ヌ．웃（上）の場合は '-t' ＞ '- ' と見るべきであろう。

ヘ．したがって 'han' も北方語的な語彙と解析すれば「王」とか「大」と解析するのが正しいと考えられる。

② 意味解析として。

イ．웃（上）＋ 왕（王）＞ 웃왕（上王），

ロ．웃왕［上の王］，と解析できれば，

ハ．Shaman と結び付けることが可能であろう。もちろんその理由は古代社会が祭政一致の社会であったということに求められるのである。

ニ．したがって，Shaman に対する用語は神聖視されたものであったことになる。

(3) Utagan（ウタガン）

Troshchanski（トロシチャンスキ）は，The Evolution of Black Faith において女性シャマンについて言及しているが，そこではシャマンの呼称が男女それぞれ異なっていたことが指摘されている。彼は，蒙古族・ブリヤート族・ヤクト族・アルタイ族・トロゴウト族・キダン族・オルキス族・トングス族・カムチャダル族・タタル族・シャモエド族の男女に各々異なった巫者の呼称について調べたところ，'Utagan' は蒙古族の女性シャマンに関わる呼称であることが判明したのである。

ここで 'Utagan'（女性シャマンの呼称）を語源的に検討してみると 'Utagan' はすでに 'Ut' ＋ 'a' ＋ 'gan' の合成語と見られるのであり，'Ut' は前節において明らかにしたとおり，その意味は「高い」「大きい」で，'-a-' は 'Ut' に添えられた接尾語の役割を果たしており，'-gan' は「居西干・居瑟邯」から「干」・「邯」と同じ意味の「祖君」といえるということになる。梁柱東は「居西干」[7] で，

始祖赫居世西干居西干，辰言王，或云呼貴人之稱〈三国羅紀一〉

因名赫居世王，蓋鄕言也，或作弗矩内王，言光明理世也，位號日居瑟邯，或作居西干，初開国之時，自稱云閼智居西干－［而］起，因其言稱之，自後為王者之尊稱〈遺史巻一新羅始祖〉

といった例をあげながら，居西干は 거한 の借字なので「始祖」「元君」の意味にすぎないといった。上記した種々の事項をまとめてみると次のようになる。

① 語学的見地から。

Utaganは，

イ．'Ut' ＋ 'a' ＋ 'gan' と分析できる。

ロ．'Ut' は stem として 'Ul' の先代語形態であることが明白。

ハ．また，'Ut' が 'Ul～Ur' の先代語だとすると，'Utagan' の語彙が 'Ulahan' の語彙よりも先代語だということになり，こうした事実は，蒙古語の女性巫者の呼称である 'Utagan' が

ブリヤトの巫者の名称の 'Ulahan' よりも先代語であろうから，ブリヤト言語は蒙古語よりも後代語である可能性を示したことになるといえよう。したがって，蒙古諸語の場合の一例として，中央語の蒙古語が地方方言よりも先代語であるということを示す好例としてこの語は把握できるものである。

ニ．'gan' は，「居西干」の「干」と同一の次元での語源的考察が要求されるものであるため，「三国史記羅記一」にあるように，「貴人之稱」と見るのが正しいだろうし，特にアルタイ諸語での語頭子音は，h : k : g が対応関係を持っていたこともすでに明白なのである。

したがって，アルタイ語系では，

'han'〈王，Manchu-Tungus 語〉

'haran'〈王，Mongo 語〉

と'gan'は同一系語であることがわかる。

②意味解析として。

イ．'웃' + '干' > 웃干

ロ．'웃干' は 'Urahan' と同一系語であるため，웃왕 と解析可能。

ハ．したがって巫者の名称を観察してみるとき，'Utagan' は'Ulahan' とか 'Ulu' などよりは先代語であり，またこうした言語的事実を通じて，巫者の名称の 'Utagan'，'Ulahan'，'Ulu' はともに地方的要素をもっているのだということがわかるのであり，こうした名称が蒙古・ブリヤト・ヤクト，それに語尾にあたる '-gan' については韓国でも，古代には用いられていたことが理解されるのである。

(4) Kam (gam)

Troschanski によると，タタル族の巫者は 'Kam' で，アルタイ族の巫者は 'Kam'，'gam' である。これに関して分析すると，

① 語学的見地から。

Kam (gam)

イ．梁柱東は彼の著書[8]で「尼師今」に対する説明から「…これは' 닛금 ' (nitkum) が「歯理」の訓と偶合されたことから生じた俗説であり，その原義は「居西干」が ' 꼿한 ' すなわち「始祖」の意味であるのに対して，' 닛금 ' (nitkum) は「嗣主」「継君」の意味なので，' 닛 ' (nit) の原形は ' 닛 ' すなわち「継」「嗣」の訓である。

聖神 ' 쏜샤도 ' [聖神雖継]〈歌125章〉

新羅の王号はまた「寐錦」がある。

昔新羅六錦，未有身来朝〈広開土王碑〉

姓参釋種，扁頭居寐錦之尊〈崔致遠　智證大師寂照塔銘〉

怨新羅王波沙寐錦則以微叱知波珍干岐為質〈日本書記巻九仲哀九年〉

「寐錦」は ' 믿금 '，その原義はやはり「始祖」[「本」訓 ' 믿 '] の意味であるから，

羅王金氏始祖「味鄒尼叱今」(末照，末召）も‘믿닢금’の意味である」と述べているが，ここからわかることは，「寐」は「始」で‘민（mit)’を意味し，「錦」は‘금’で「祖」を意味するので，‘Kam’は‘금(Kum)’で「祖」の意味である。したがって‘Kam’は‘왕(wang)’とか‘한（han)’の意味の‘임금(imkum＝王様)’を表わす。また，Altai 諸語から見られる音韻現象のうち，語頭子音 k：g は音韻対応関係にあるため，‘gam’もやはり‘왕(wang＝王様)’‘임금（imkum ＝君主)’の意味といえる。それゆえ，結局，‘Kam (gam)’は語学的見地から見るとき，韓語 금に当たりながら日本語の‘Kami’とも比較されうる，ということである。

ロ．梁柱東の上掲書中の朱蒙に対する説明のうち[9]，いくつかの事実を要約しておこう。

東明聖王，姓高氏諱朱蒙，一云鄒国，一云象解〈三国史，句麗紀一〉

惟著始祖鄒牟王之創基也，出自北夫餘〈広開土王碑〉

高麗仲牟王，初建国時，欲治千世也〈日本書紀天智七年〉

菅野朝臣，同国都慕大王十世孫貴須王之後也〈新撰姓氏録，大京諸藩〉

彼は，「朱蒙」は「朱蒙・鄒国・仲牟・都慕」などと記写されたがその原音は‘즘(ズム)’であると述べながら，‘금（kum)’との関係を[10]「末鄒尼叱今，一作味炤，又末祖，又末召［「召」古音‘조（チョ)’］〈遺事王暦〉

鉄匠仲源府人香渊〈菩提寺大鏡大師塔碑〉

弟子大徳釋聰訓忠原府上聰釋訓χ〈覚渊寺通一大師塔碑〉

尚質縣，本百済上泰縣〈三国事地理三〉

のようなものだとしている。

それでは‘즘(ズム)’の原語は何であろうか。これはまさにほかでもなく，ㄱ ～ ㅈ 通音による「神」「王」の古語‘금(Kum)’の音転にすぎない。

‘길（kil)（路）－ 질（zil)’‘정릉（chungreng)（貞陵）－ 경릉（kyungreung)’のような ㄱ ～ ㅈ 通音は上古以来そうであったという点から推測すると，‘Kam’と‘ʒ亦m(ズム)’は相通じることがわかる。したがって‘Kam’，‘gam’，‘ʒ亦m’の‘금’‘즘’は同意味同語源であることが明らかになったわけである。

② 意味解析として。

イ．Kam（gam）は‘금’で「神」を表し，日本語の‘Kami’にも通じる。

ロ．‘금’は‘즘’で「神人」ないし「祭司者」をさす。梁柱東は「朱蒙」の本意を夫餘語で「善財者」であるとし，これは「満州源流考」，乾隆帝「三韓訂謬」には満州語「草淋莽阿」に擬されるものである。また，梁柱東は‘즘(ズム)’が夫餘語「善財者」の意味であり，古狩猟時代においては「善財者」を「神人」と尊敬したのであると述べている。

ハ．‘Kam’が‘Kom’（熊）と同じ語源だとすると，それは‘곰（熊)’の崇拝思想から来たものということになろう。そのように考えると‘Kam’は神聖なることと関連された意味だと解析できるのである。

(5) baksa (basky)

韓国では男巫をさすことばで，‘박수（baksu)’といい，これを「ト師」「ト術」「博士」という。中北部地方では，男巫名称にいくつかのバリエーションがある[11]。李圭景は男巫を俗称花郎または博士と言うと述べている。また，李能和は蔡済恭の「樊岩集」，南考温の「秋江冷話」，成俔の「虚白堂集」，金誠一の「鶴峯集」，丁若鏞の「牧民心書」などで，男巫を‘박수（博数paksu)’としているのをとらえて，これは博士または卜師の訛伝とはいえないのではないかといった。北部地方では男巫を卜術といい[12]，Eliade もキルキズでは Shaman を ‘bapçsa’ というと指摘している[13]。金悦圭は，赫居世に対する説明で[14]，「赫居世は弗矩内と発音するようになっている。‘Palǵam’ くらいに発音するようになっているわけである。これは東北アジアの一種族で占術するシャマンすなわちカンナギが ‘Palási’ と呼ばれていることを連想させてくれる。しかしこの二つの単語を同じものと断定する根拠はない。‘Palǵsi’ は語源自体も問題となっている。」とし，彼は「赫居世」と「弗矩内」‘Palási’ とを同じ次元から捉えている。これは ‘Palási’ の赫居世が ‘baksa (basky)’ に対する問題を解決してくれる鍵になるものと考えられる。また，Troschanski が，キルギス族は男巫を ‘baksa（basky)’ というとしている点は Mercia Eliade と共通した見方をとっているものだということなのである。

① 語学的見地から

イ．梁柱東は赫居世に対する説明から[15]，

「始祖赫居世居西干，始祖，姓朴氏，諱赫居世〈三国史羅紀一〉，赫居世王蓋郷言也，惑作弗矩内王，言光明理世也，位號日居瑟邦　惑作居西干，初国開国之時，自稱云門智居西干ー［而］起，因其言稱之，自後為王者之尊稱〈遺事巻一新羅始祖〉」

と言ったが，ここからかわる事実は，「赫居世」「弗矩内」「居西干（居瑟邦)」はすなわち「光明理世」とも通じる意味を持っており，こうした理由から 곳한 の借字であろう。

ロ．‘baksa（basky)’ と係わった語彙を蒙古語辞典を通じて調べてみると次のとおりである。

以上の註16)，17)，18)，19)から ‘baksa（basky)’ と同一形態に近いのは註16)にあたる ‘buka’ である。したがって上の事実から見るとき，‘baksa（basky)’ ‘buka’ は ‘shaman’ と同じ意味であり，またこうしたものは ‘赫居世’ ‘弗矩内’ とも相通じると考えられる。

○ shaman[16]： ○ god[17]： ・ ○ God[18]：T3HΓP　○ shaman[19]：bθθ

② 意味解析として

イ．‘palq'nai’ ‘pala'si’ ‘pala'is と赫居世である弗矩内との関係を考えると，こうした意味は‘붉’‘곳한’‘감’と同じ次元から考えられる。

ロ．また ‘baksa（basky)’ ‘buka’ は ‘shaman’ と関連があるため ‘神’ との関連も考えることができる。

ハ．したがって，‘神聖なること’ とは離れられないという意味に解釈すべきであると思われる。それ故にその意味は，‘かんなぎ’ ‘神’ ‘祭司長’ ‘尊敬すべき人’ を表わす。

実際，今日の蒙古では，‘尊敬する師’ という意味に ‘Sain Bagsh’ という名称を用いてい

ることからみても，'Bagsh' は '相当の位置にいる人' とみるのが正しいようである。

3　かんなぎ語系の名称と意味，そして語源研究

(1)　ソンダン[20]

済州道では元来 'ソンダン' の意味を '神域' とか '神聖な祭壇' とみなしてきた。ところが，「今日では一つの独立した村の名に呼称されている」を，秦教授は述べている[21]。ところで，これに対する言語学的分析と意味は次のとおりである。

① 語学的見地から

ソンダンは，' 손(ソン)' ＋ ' 당(ダン)' の合成語とみるべきであり，したがって，言語学的な分析も ' 손 ' と ' 당 ' を別個に分けて考えたほうがよい。

イ．' 손 ' は満州ごで 'šun' にあたる語で，意味は '太陽' である。この 'šun' を音写すると 'シュン[12]' となるが，この 'シュン' は単母音化現象によって 'スン' になったのであると思われるし，この 'スン' をおそらく済州道の先住民たちは 'ソン' と陽性母音化したまま今日まで使用しているといえよう。また，満州語の 'šun' は 해 である。

ロ．'ダン' は漢語の '堂' から音借したものである。したがって，'ソンダン' は，

- 満州語（šun）＋漢語（堂）であり，
- 'ソン' は 'šun' の単母音化現象であるといえ，そのうえ陽性母音化現象が複合したものとみるのが妥当であるといえよう。

ハ．また，以上のこととは単なる言語学的現象も考えられる。

- 'ソン' は満州語 'somo' からくる可能性も高い。
- 'somo' の意味は，'天口誓ひ祈る時口立てる神杆[23]' または，'the voice or spirit pole erected by manchu families[24]' である。
- したがって，'somo' の意味は，'神聖な地域の神杆' であろう。
- 'somo' は，'som' ＋ '-o' と分解でき，ここで 'som' は stem で，'-o' は添加接尾語ということもできる。ところが，Tungus 語系では，'m' と 'n' とをはっきりと区別しないらしい[25]。

　したがって，m と n は同一の条件においてどちらも同じ語として表記されることがあるのである。そのため 'som' と 'son' が同一の語として考えられるので，この形態は SUt ＞ SU（m～n）とみなすことができよう。

ニ．'ソンダン' は '蘇塗' と比較すつこともありえる。

- 「 솟대(sotte) の起源で馬韓と百済の時，村毎に鈴と太鼓をつけた大きい木を立てて鬼神に祭祀したこと」〈国語新辞典〉
- 「祭祀を行ったところ。三韓の時，祭政が分離されたのち，君主に対して天君という祭主がおり，その祭祀地域を '蘇塗' と呼んだ。'蘇塗' は ' 솟터(sotte)' の音訳で ' 솟터

(sottə)'（高台）という意味」〈新百科事典〉

- 「大きい農家で豊年を願って新年にならないうちに稲の種を入れた袋を取り付けて上げる竹ざお蘇塗を起源とするもの」〈標準国語辞典〉

以上の3点において'蘇塗'に対する説明は各々異なっているが，この三つに共通する点はすべて祭儀との関連を示しているところである。ところでこの'ソンダン'を'somote'に関連させると，ホ．とつながりをもってくる。

ホ．'ソンダン'が満州語'somote'と関連性がある理由は，'somo'が'神聖な地域の神杆'という意味であり，'te'が'場所'を意味することから，'ソンダン'と'somote'が同一の意味を有しているといえることによる。また，'somo'は'som'＋'-o'で，'som'はTungusの語尾関係では'son'と同一のものといえる。したがって，'son'と'som'は共通した造語が'SUn'になり，また'te'は'場所'のことであるから，その全体の意味は'神聖な地域で神杆のある場所'となる。

上記のことより，SUt＋te＞SUt＋e＞SUteへと変化したわけも理解することが可能である。

ヘ．最後に，'ソンダン'を'šurhū'とも比較可能なわけは次のような理由による。

- 'šurhū'は鳥を表わし，
- 'šurhū'は'šur'＋'hū'で，語幹の'šur'は'SUt'から'SUr'へ変化した変異形態'sur'であろう。
- したがって，'SUt'型の'sot'と'蘇塗'の'sote'とは同根語形態であろう。

② 意味解析として

イ．'ソンダン'は，満州語音訳＋漢語であるので，

ロ．'神聖な地域あるいは場所''ダント'という意味に解釈でき，

ハ．特に済州道地方にこうした名称が残っているというのは，我々にとって注目すべき事実といえよう。

(2) obo [ovoo]

一般的に，'obo'は漢語で'邦博'にあたり，蒙古の全地域に広く散在している。

日本の民族学者の秋葉[26]は，「蒙古にはいたるところに邦博という石磧があるが，その中央に神杆を立てて印篠をさし，また，多数の小杆をたてたものもあるし，ひもりという幣帛を多く結んでいた。また，ひもりを右の綱の禁縄につないでかけたのもある。僕が蒙古旅行の時，興安南省王廟家古人部落の村のoboを調べる時，二つの木核神鳥が腐った神杆から落ちているものを採集した。蒙古のoboにもたまたま神杆があるとの事実である。ところが，このoboは朝鮮の石磧長生，または，石磧聖所とよく似ている形態であり，その位置も旗界（行政，軍事単位），村界，寺廟の周囲，山上等である。その機能も道標，境界標，禁忌標，守護神等の意味を持つ。行人がこの石磧に石を捧げて行き過ぎることまで朝鮮の石磧と類似している。また，これが部落の守護

神となっている場合には，毎年五月の吉日を選んで obo の前に羊肉，好酒等を捧げ，ラマ僧の読経と村吏，村長等の叩頭拝礼があって，最後には一同が obo を三周し祭物を下げ共饗してから競馬，すもう等の余興をたのしむ。また，'ブリヤト' 以外の蒙古人は原則として男子だけがこれに参加するといい，それは恰も朝鮮の至る所に石磧または，石築の土壇があってそこを村の聖所として毎年村の浄人（ほとんど男子）を選んで祭祀を行うことと類似している」といった。obo の表記には 'obo' 'ovoo' などいくつかの説があり，その意味は，イ．祭祀 obo（天神地祇を祭祀する），ロ．道路の標識，ハ．部落の存在を知らせるもの，ニ．境界を表示するもの，などが広く知られている。

① 語学的見地から

イ．'obo' という語彙は，次のように分析できる。

- 'obo' が '天神を奉る祭祀の場所' だとすると，'obo' は 'ut～bö' の合成語が縮約されて 'obo' になった可能性がある。したがって，ここからわかることは 'ut' が 'o' に，'bo' が 'bö' になって今日のような 'obo' という一つの単語になったかもしれないということである。
- また，Troshchanski によると，'Buriat' のかんなぎを 'buge' というが，それは 'bö' ともいうという。
- したがって，'obo' は，'ut ＋ bö' が縮約され単一化した形態であると考えられる。

ロ．'obo' という語彙は，違った立場からも分析できる。

- 'obo' を '男性シャマンを象徴する祠堂' のような役割とみなすと（というのも obo の場所にはかならず '柳の木' でできた旗棒がさされており，それが '男性性器' とも関連があるかもしれないことは否定しきれないからである），'obo' は 'oiun（Yakut 族の男性シャマンの名称）' と 'bo' という Buriat 男性シャマンに対する名称の合成語というふうにも考えられる。
- その理由は，'obo' が次のように分解できるからである。

(a) 'obo' は 'o' ＋ 'bo' の合成語とみなすことができる。

(b) というのも 'o' は 'oĭun' の 'oĭ' に該当し，'bo' は蒙古族，Buriat 族の男性シャマンを示す名称 'buge' の異なった形態である 'bo' に該当するからである。

(c) したがって，'obo' は 'oĭun' ＋ 'buge' を縮約したものとみなすこともできる。というのもおそらく 'oĭun' は 'oĭ ＋ 'un' であり，'oĭ' は stem 部分にあたり，'-un' は添加語尾の役割を果たしているにすぎない。また 'buge' も 'bu ＋ ge' に分けられ，'bu' は stem にあたり，'-ge' は添加語尾の役割を果たしている。'buge'の場合は異形態が'bo'で，これは Troshchanski の調べたものの異形態でもあるといえるが，'buge' の stem にあたる 'bu-' が母音変化したものとみなすことができる。

(d) 以上のことから，'obo' は複合した合成語であるといえよう。

② 意味の解釈

イ．‘obo’を‘ut ＋ bo’の合成語とみるとき，その意味は，‘天神を奉る男性シャマン’か，‘天神地祇を祭祀する男性シャマンの基盤’などにとることができ，

ロ．‘obo’を‘oiun ＋ buge’の合成語とみるとき，その意味は，‘男性シャマン’の複合語として，男性シャマンの強調形となり，oboの祭主は男性シャマンであることも立証し，このことは‘obo’にさされている旗棒が柳の木であることからもわかる。

4　結　び

以上のように筆者は，‘かんなぎおよび巫俗語系に対する意味と部分的な語源探索の短見’を通じて，はじめは‘かんなぎの名称’に対する言語学的見解とその意味，次に‘巫俗語系の名称’に対する言語学的見解とその意味を可能なかぎりあらゆる側面から考察しようと努めた。しかし，筆者の鋭いとは言い難い学統的基盤から本来の意図を思いどおりにあらわすことができたかについては疑わしい。

なにしろ，ウラル・アルタイ語系の‘かんなぎ’および‘かんなぎ語系’の名称は，相当な数におよぶのである。しかし，論文の性格と紙面の都合上，しかたなくきわめて一部分を紹介しながら肉付けをすることになった。本論文で得られたことをいくつか要約すると，次のようになる。

はじめに，かんなぎの名称からあらわれた‘ペクチュ（白主）’‘koekchuch’‘ulahan-oiun’‘utagan’‘saman（haman）’‘kam’‘baksa（basky）’などからこれは同系語か同根語の異形態と関連があるか，少なくとも部分的には反映している。

二番目に，これらの語源的な存在形態や意味が共通性をもっているという点。

三番目に，巫俗語系の名称にみられる‘ソンダン’‘obo（obo）’が韓国語と無関係とは言い切れぬ関連性をもっていた点。

四番目に，以上のことを通じて，これらの名称から得られた語源上の成果は，韓国語と同根語か同系語であることと，また，こうした作業は今後も続けていくべきであるということである。

また，本論文を通じて考察される推論も簡単に要約すると，以下のようになる。

はじめに，比較言語学であれ，比較民俗学であれ，とにかく比較文化において最も重要なことは，イ．基礎的な言語の比較，ロ．先に発生したと思われる原始信仰に対する語彙および周辺言語に対する相互関係の対比をつねに念頭に置き研磨すべきこと。

二番目に，韓国語と韓国の民俗は北方文化の残滓であることを，多くの問題点を孕みつつも認めるべきであるという点。

三番目に，原始韓国語は，非常に簡単明瞭であったが，時間が経つにつれて，とても複雑かつ微妙に変化した点。

四番目に，今まで検討した語彙の意味が，‘神聖さ’‘神’‘絶対的なもの’とおそらく関連性をもっているという点。

今回の論文を契機にして，筆者は語源研究にはますます誠意のある態度が必要であり慎重な態度が求められるということがわかった。これらのことを今後とも自戒の訓としていきたいと思う。

[註]

1．朴相圭：「済州道地方にあらわれた Altai 語彙要素考」
　　済州道研究第三集 pp. 209～210再引用
2．秦聖麒：「南国の地名由来」済州民俗叢書(7) p. 10
3．梁柱東：「国学研究論攷」乙酉文化史，ソウル pp. 148～150
4．安自山：「朝鮮文学史」(全) p. 178

6．梁柱東は，彼の著書'国学研究論攷'（pp. 171～173）の「乙支」に対する説明のところで，「乙」という字は終声（吐，받침）では「을，己」をあらわすが，古借字の語首では「읒(上)」に使われる，これは「乙」の古音が「은」であるためだ（一般に「ㄹ」種漢字の古原音は「ㄷ」種－「古歌研究」426, p. 198)，以上のような見解を明らかにした。この「乙」と「ul」は同一の語源であると考えられる。そして，梁柱東が明らかにしたように，「ul」は「ut」から変化したのである。
7．梁柱東　前掲書pp. 164～165
8．梁柱東　前掲書pp. 159～161
9．梁柱東　前掲書pp. 159～160
10. 金秦坤“韓国巫系の分化変遷”「韓国民俗学創刊号」p. 56
11. 李能和様参照
12. 村山智順（1932)，“朝鮮の巫覡”「朝鮮總督府」p. 40
13. Mircea Eliade（1964）“Shamanism” p. 20
14. 金烈圭（1991）“韓国神話の基底”「大学国語」日景園大学出版部 p. 74
15. 梁柱東　前掲書pp158～159
16. A Concise English-Mongolian Dictionary, John G.Hangin　内蒙古教育出版社 p. 438 内蒙古 1986
17. 上掲書p205
18. A Concise English-Mongolian Dictionary, John G.Hangin p. 90
　Published by Indiana University, Bloomington Mouton&Co. The Hague, The Netherlands
19. 上掲書 p. 213
20. 朴相圭　前掲書 pp. 206～209から部分的に再引用しながら説明した。
21. 秦聖麒「済州道地名の由来集」p. 64
22. 同門類解，延禧大学校　東方学研究書 p. 3
23. 満和辞典，羽田亨編　参照
24. Norman A Manchu-English Lexicon　参照
25. M. A. Castren Tungusisghen sprachiehere　参照
26. 金斗河（1990）“博数と　장승（チャンスン)”ソウル集文堂 p. 50